



世界に希望を生み出そう

RI 会長：ゴードン R. マッキナリー

2620 地区ガバナー：中村 皇積

会長：渥美 聡一郎 幹事：志賀口 裕輔 会場監督：内山 義之

例会：毎週金曜日 19:00 ~ 20:00

グランドホテル浜松 〒432-8507 浜松市中区東伊場 1-3-1 Tel: 053-450-3003 Fax: 053-450-3006

E-Mail: hamamatsu-naka@ri2620.gr.jp

2023年12月8日(金) 晴 第1641回例会 週報 NO. 17

司 会：竹内公一 会場監督補佐
点 鐘：渥美聡一郎 会長
ロータリーソング「我らの生業」
「四つのテスト」唱和 原英登さん

ゲスト

NPO 法人 World Theater Project
代表 教来石 小織 様

会長挨拶



今日はここからの景色がいつもと違う感じです。会社を経営されている方は12月ともなると金曜の夜はスケジュールが重なってしまうことが多いかと思います。今日は理事会もあるのですが、出席状況が芳しくありません。今後のロータリーを考える上での問題の一つでしょう。

皆さんあまりご存じでないかもしれませんが、川井啓介さんが委員長で昨年度・今年度・来年度の会長幹事により構成されているクラブ戦略委員会があり、ミーティングを行っています。将来のクラブのビジョンを考えるには、メンバーが楽しく出席できる例会を形作ることを考えることが重要です。私も努力して出席率を上げていきたいと思います。

今日はゲストに教来石小織さんにお越しいただいています。無茶ぶりされた露木さんが尽力して

くれました。とても興味深いお話を聞くことができると思います。

幹事報告

☆中村将義 副幹事



回覧・・・Rotary 誌

ガバナー月信

- ・次週 100%出席例会です。
- ・大きくなりすぎたミカンを持ってきました。お持ち帰り下さい。

スマイル

♪渥美聡一郎さん

本日は教来石小織様をお迎えして、活動についてお話をいただきます。楽しみにしています。



♪佐藤芳一さん

75 歳になり、ついにドクターズトップくらいでした。ヨヨヨ...



卓話「World Theater Project の活動について」

☆ゲスト紹介：露木利行さん

教来石さんは映画館のない地域に映画を届ける活動をしている NPO の代表です。メディアでも幾たびか取り上げられて、フジテレビ系「セブンルール」でも特集されました。



☆教来石 小織 様



初めて浜松にきました。お土産売り場を見て面白いものがいろいろあってワクワクしました。私は千葉で育ちましたが、あまり名物がありません。ピーナツくらいなのですが、浜松のピーナツ最中に「元祖」とあって、これも千葉ではなかったのかと思いました。

私たちは World Theater Project という NPO です。以前 NHK ワールドで放送された時にそれを見たイギリスの方が紹介の動画を作ってくれたことがあります。それをまずご覧ください。

私たちは、途上国の子どもたちに移動映画館を届けています。途上国への支援というと、医療や食糧が多いかと思います。映画は生きていくのに必要とは言えないものですが、私たちは「生まれ育った環境に関係なく、子どもたちが夢を描き、人生を切り開ける世界を作る」というビジョンを掲げています。

私の母は島根県の田舎町で育ちました。町には一つしか映画館がありませんでしたが、そこでたくさんの夢をもらい勉強を頑張ったそうです。その影響で私も小さい頃から映画をよく見て、夢を膨らませていました。ですので、ある日見た映画が、その子の夢のきっかけになるといいなと思いながら活動を続けています。

2012年に設立し、NPO 法人としていろいろな団体の協力を得ながら、現在までにカンボジアはじめ世界 16 か国、8 万人の子どもたちに映画を届けました。上映するのは子どもたちの心を良い方向に育み、夢が広がったり、努力する大切さを教えてくれるような作品です。許可を得てすべて現地のことばに吹き替えています。コロナの間は移動映画館は中止していましたが、海外の映画祭から良い作品を探す試みを行いました。それまでは日本のアニメが多かったのですが、スペインの短編映画も上映させていただけるようになりました。昨年は権利関係が難しいと言われるディズニーの作品も上映する契約を結ぶことができました。対象は主に農村部や映画館のない地域ですが、それとは別に、戦争や災害によって子どもたちに心のケアが必要なところでも上映したいと緊急化の映画支援プロジェクトのサイトも立ち上げました。趣旨に賛同した監督の方から映画を提供いただき、現地の支援協力をしてもらうポータルサイトです。現地で入場料を頂くことはできないので、活動を支えているのは、日本のサポーターの皆さんです。

11 年前、私は派遣の事務員をしていました。30 歳を超え子宮頸がんの検査に引っかかり、人生の

どん底にいるような気持ちで、私は人生で何をしたかったのだろうと考えました。そんな時、カンボジアの子供たちに映画を届けたいという思いが神の啓示のように降ってきました。実はその 10 年前にも同じようなことを思ったことがあります。大学生の時は監督になりたくて映画の勉強をしていました。在学中にドキュメンタリーを撮りにケニアへ行きました。村の子どもたちに「将来の夢はなんですか？」と質問しながらビデオを回していましたが、子どもたちから返ってくる答えはとてもわずかででした。帰国してから考えました。子どもたちに夢があまりないのは何故だろう。その村は映画館もテレビもなく、子どもたちは将来の夢を思い浮かべることができないのではないかと。もし、あの村に映画館があったら、あの子どもたちはどんな夢を見るのだろうと思ったのです。その時はそこで終わりましたが、人生に絶望した時に同じことを考えました。話の流れ的にはケニアですが、ケニアは遠過ぎます。それでカンボジアの子どもを対象に活動を始めました。

カンボジアとは縁もゆかりもなく、映画と離れた仕事をしていたので、私がまず始めたのは、私がやりたいことをいろいろな人に話すことでした。初めは映画館を作りたいと思っていましたが、最初のフォロワーを見つけることができました。その人のアドバイスでカンボジアを調べてみると、かつては東南アジアで 1 番といわれるくらい映画の制作も行われている国でした。でも 1975 年に起きた大虐殺で、それまであった文化が滅びていったのです。それを知って益々カンボジアに映画を届けたいと思うようになりました。

その次にしたのが、逃げられないようにすることです。何をしに行ったらよいかわからないまま、三か月後の航空券を買いました。

カンボジアでイベントに足を運んでいるうちに 2 つの小学校で上映できることになりました。私のベッドのシーツをスクリーンにして、友だちに借りたプロジェクターで上映しました。映画のあとの

子どもたちの笑顔は私が恋焦がれていたものでした。それを見て、私はこの活動を一生続けようと決意しました。この時は日本語版でしたが、子どもたちに「今度は字幕版か吹き替え版にするね」と約束しました。上映権の問題もあり、一度日本へ戻りました。

字幕版か吹き替え版かについては、字幕版のほうがはるかに安いです。でも吹き替え版を作りたいと思いました。カンボジアは内戦の影響もあって識字率が高くありません。でもどうやったら吹き替え版を作ることができるのか、わかりませんでした。ところが上智大学のカンボジアの先生に会うことができ、しかもその親戚の方がカンボジアで声優の事務所をやっていました。奇跡が続き、権利上もクリアしてやなせたかし原作の「春の笛」を上映することができました。今度は前よりも子どもたちが喜びました。

最初は映画館を作りたかったのですが、それでは多くの子どもたちが見ることはできません。移動映画館にすることでプロジェクトが正式にスタートしました。

でも派遣の事務員で貯めたお金はどんどん減ってしまいました。そんな時、「あなたの夢を語ったら賞金 2000 万円」という大会があり、応募してみました。幸運なことに優勝することができましたが、賞金 2000 万円というのは勘違いで、会社に対する出資か融資だったのです。私たちは NPO なのでそれを受け取ることができず、何とかできないかと奔走しましたが、うまくいきませんでした。さらに内部の意見の対立から仲間割れが起きてしまいました。そんな落ち込んだ時に心の中にあったのは「3 つの A」でした。これは私が活動を始めた時に、アンコールワットの修復を続けている日本人の方から教えていただいたことばです。何か夢にむかって進むには 3 つの A、「焦らない」「当てにしない」「諦めない」を大事にするとよいということでした。これを胸に次に進もうと思いました。

年に 1~2 回日本人のメンバーが現地に行って移動映画館を行って

いましたが、それではとてもビジョンに到達しません。紙芝居のおじさんのような映画を届けるカンボジア人のおじさん（映画配達人）がいたらいいなと思っていました。当時一緒に活動していた大学生の子が申し出て、カンボジアに駐在して、トゥクトゥクドライバーの人たちに副業として配達人になってもらうことができました。その時はクラウドファンディングで彼の駐在費を多くの方からご支援いただきました。カンボジアではアンコールワットのシェムリアップ州と昔特に映画が栄えていたバタンバン州の2か所を起点にして活動しています。

映画配達人の一人、サロンさんは右の手足が不自由です。小さい時にポリオに罹ったからだそうです。障害があるため、小さい時から多くのいじめにあって自殺も図りましたが、命は助かりました。神様が助けてくれたと気持ち新たに英語を独学で学び、トゥクトゥクドライバーとしてたくさんのお客さんを乗せています。映画の上映に学校へ行った時も先生と対等に話をしたり、子どもたちを喜ばせたり、とても誇り仕事をもってできる仕事だと言ってくれます。

彼らのお陰で月に8回、年間1万人くらいの子どもたちに見てもらうことができます。

それまでカンボジアだけを対象としていましたが、ほかの国にも映画を届けたいと思いました。ですが費用が足りません。吹き替え版を作るのに、ほとんどボランティアでやっても60分の映画で30万円くらいかかるのです。

そんな状況を打開してくれたのが、俳優で監督の斎藤工さんでした。彼も日本で移動映画館をされていて、私たちの団体の事を知って彼のラジオ番組にゲストで呼んでいただきました。映画の権利金や吹き替え版を作るお金がないことを話したからか、ある時、世界中の子どもたちのために権利フリーの言葉のない映画を作らないかとお話を

頂きました。斎藤さんの番組の特別企画として、クラウドファンディングでたくさんの支援を頂きそのクレイアニメを完成させることができました。各国から声がかかり、青年海外協力隊や各国で活動している方たちの協力で、バングラデシュ、マダガスカル、モンゴル、ドミニカ共和国、フィリピン、タンザニア、ネパールなどのいろいろな国に映画を届けることができました。

そんな矢先、新型コロナウイルスが世界中に広まり、映画を見に人が集まることができなくなりました。やめてしまおうとも思いましたが、上映できない間に、作品を集めたり、映画の効果をデータ化してみたりしました。昨年9月からまたカンボジアで上映ができるようになり、やっと最近定着してきたようになりました。

最後に宣伝をさせて頂きます。この活動についての本を書きました。アマゾンで買えるはずですが、最近の活動についての説明会が12月16日にオンラインであります。興味がありましたらご参加ください。それから、寄付型支援自販機という売り上げの何パーセントかが寄付になる自販機ですが、置かせていただけるところを募集しております。カンボジアの子どもに映画を届けるスタディーツアーもやっています。またギフトシネマ会員というマンスリー会員も募集しています。今まで100円で一人の子に映画が届く計算でしたが、円安で150円くらいになってしまいました。

今日は貴重な場でお話させていただき、どうもありがとうございます。



会場監督 竹内公一さん



「四つのテスト」 原英登さん



出席報告

発表：杉本靖和 出席委員

会員数	41名
出席者数	15名
出席算定会員数	34名
出席率	44.12%

前々回出席者数
20名
前々回出席率
58.82%

